

熊本地震復興支援ボランティア活動および 学生ボランティア支援の考察

Reflections on Student Volunteer Activities After the Kumamoto Earthquake
and Teacher Support for Those Activities

丸山 智子*	酒井 康江*	森谷 由美子**
Tomoko Maruyama	Yasue Sakai	Yumiko Moriya
松尾 和枝*	貞野 宏之*	金田 俊郎*
Kazue Matsuo	Hiroyuki Sadano	Shnrou Kaneda

要 旨

〔目的〕本報告では、2016年12月から2018年3月まで実施した熊本地震復興支援ボランティア活動（1次隊から5次隊）および学生ボランティア支援について振り返り評価を行い、今後の課題を見出すことを目的とする。

〔方法〕2016年12月から2018年3月までの熊本地震復興支援ボランティア活動および学生ボランティア支援について「熊本応援したかった 活動報告書 第1報、第2報」を用いて考察する。

〔結果〕熊本地震復興支援ボランティア活動の活動前では、活動内容の企画立案を行い、受け入れ団体との調整を行った。活動中は、健康測定会とミニ講和や子ども交流などの活動をタイムリーに情報発信していった。活動後は、情報共有を行えるように報告書作成やチャペルでの報告を行った。学生ボランティア支援では、隊員構成として他学年との交流や活動2回参加など学生の主体性を引き出すことが出来るような関りを行った。

〔考察〕熊本地震復興支援ボランティア活動の活動前では、教員が受け入れ団体の調整、学生と現地のニーズのマッチングを行い、コーディネートの役割を果たすことが出来ていた。活動中は、活動が学生の対人スキル向上につながり、他学科学生との協働作業により、学生は視野と人間関係の広がりを持つことが出来た。活動後は、様々な場面での報告を行うことで多くの人に知ってもらう機会を持つことが出来たと考えられる。学生ボランティア支援では、学生は他学年との交流でよい刺激を受けて活動を2回行うことでリーダーシップを発揮することが出来ていた。

キーワード：ボランティア活動、熊本地震、復興支援、学生ボランティア支援

*福岡女学院看護大学 **福岡女学院大学

I. 緒言

阪神・淡路大震災以降、人々のボランティアに対する関心は高まり、平成25年の総務省統計局の結果で災害ボランティア活動を行った人の割合は、3.8%で平成18年の1.2%と比べると、2.6ポイント上昇している。なかでも在学者の行動者率を学校の種類別にみると、大学・大学院が最も高くなっ

ている。学生は、人の役に立ちたいという動機があってもボランティア活動はどこで何をを行い、計画を立案し調整していくのかなど方法についてはわからない。特に看護大学生は過密カリキュラムの中で時間もない。

佐々木（2003）の結果でも若者のボランティア活動参加の障害として時間的なコストが最も多く上がっていた。そのことから学生が災害ボランティ

ア活動が出来るように教員による学生ボランティア支援が必要である。

ボランティアにおける災害救援支援活動は、ボランティアと被災者のニーズをつなぐコーディネートの機能が求められる（本間，2014）。

菅（2011）は、必要な支援を組み立てていくことも災害ボランティアの重要な役割であると述べている。

最近相次ぐ災害に、多くの大学生が復興に向けたボランティア活動に関与しているのは、あらゆる報道で知られている。大学が被災地の復興に寄与することは、教育・研究機関として社会的責任を果たすだけでなく、大学の使命のひとつである社会貢献を果たすことにも繋がる。また学生の社会性・人間性を育む教育的見地としてもその効果は高いことから、ボランティア経験を単位として認めている大学もある。2012年から3年間続いた本学での「東日本大震災復興支援ボランティアスタディツアー」でも教育的効果が報告されている（酒井ら，2016）。

2016年4月14日21時26分頃、熊本で震度7（M6.5）の地震が発生。のちにこれは「熊本地震」の前震と言われた。それから、わずか28時間後の16日1時25分頃、震度7（M7.3）の本震が発生した。その後も震度7クラスの揺れが連続して起き、余震は2000回を超えた前例のない災害となった。死者50人、災害関連死167人（2017年4月時点）、負傷者2408人、避難者は最大18万3882人（熊本県人口の約10%）、建物被害は17万822棟に及んだ。

我々は、2012年「東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアー」で看護学生を引率した経験から、学生でも被災地で出来ることが多くあること、また学生が被災地から学ぶ意義が高いことを痛感していた。しかしこの時は距離的な問題からシームレスな継続支援が叶わなかった。災害復興期に頻発する様々な健康問題には、息の長い活動が必要であることを感じていたことから、隣県にある看護大学だからこそ、出来ることは必ずあると確信し、学生引率の企画をした。

被災地支援に入るボランティアは、原則、自己完結型で、被災者への救援物資や義捐金に手をつ

けるわけにはいかない。つまり、自分達の衣食住の確保ができて初めて現地入り出来る。受け入れ団体や、活動資金の目途がついた2016年10月、ボランティア活動発案者が学長や学部長に、ボランティア募集要項（企画書）を持参し12月の第1次隊出発を相談した。「熊本応援したかつ隊」のネーミングの提案は、災害看護を担当する前学部長だった。

本報告では、2016年12月から2018年3月まで実施した熊本地震復興支援ボランティア活動（1次隊から5次隊）および学生ボランティア支援について振り返り評価を行い、今後の課題を見出すことを目的とする。

II. 方法

1. 熊本応援したかつ隊概要

1) ボランティア活動期間

2016年12月～2018年3月（1次隊～5次隊）

2) 隊員構成

2016年度

12月 1次隊 A看護大学学生3名 教員2名

3月 2次隊 A看護大学学生4名 教員2名

2017年度

8月 3次隊 A看護大学学生4名 教員3名
B大学学生2名（子ども発達学科）

12月 4次隊 A看護大学学生4名 教員3名
B大学学生2名（子ども発達学科）

3月 5次隊 A看護大学学生4名 教員3名
B大学学生2名（子ども発達学科）

2. ボランティア活動計画

1) 活動前

ツアー前後を含めたスケジュール立案・役割分担・活動場所のリサーチ・事前課題の設定・活動内容の企画立案などを行う。

2) 活動中（内容）

被災者の介護予防やリラクゼーション効果をもたらすような健康学習会、子どもらの発達や情緒安定を促すレクリエーション等を実施する。活動内容は、現地のニーズに応じて適宜、変更や改良を行っていく。活動中はNUCCS（学内ネットワー

ク)により、参加していない学生および教職員にも現地での様子をタイムリーに発信する。

3) 活動後

報告書作成・オープンキャンパス/チャペル/学園祭(11月の学園祭で、被災者住民作成の手芸用品を販売し、その収益を被災地に還元することを計画)/看護大ホームページ(以後、HPと略す)への活動報告などを行う。

3. 学生ボランティア支援

1) 活動回数：長期休暇を利用し1年間で3回を計画する。

2) 隊員

(1) 参加回数は、継続支援を目的に、学生一人当たり2回以上参加する。

(2) 所属・グループ学生配置は、看護学科と子ども発達学科の学生が協働して活動する。

3) 支援方法：活動前中後と一貫して、学生の自主的な運営を促す。

4. 分析方法：「熊本応援したかっ隊活動報告書第1報：2016年度」、「熊本応援したかっ隊活動報告書第2報：2017年度」を用いて、熊本地震復興支援ボランティア活動(1次隊から5次隊)および学生ボランティア支援について振り返る。

5. 倫理的配慮

ボランティア活動報告書および論文作成についてはキャンパス熊本、九州キリスト災害支援センターの施設長と学生より許可を得た。

用語の定義

活動：ボランティア活動前(準備)、活動中(内容)、活動後(報告)を示す。

学生ボランティア支援：教員が行う学生ボランティア活動を支援する内容、方法を示す。

Ⅲ. 結果

ボランティア活動は、受け入れてくれる団体が

なければ、活動は始まらない。事前に教員が受け入れ団体の確保を行った。

1. 学生受け入れ団体

1) キャンパス熊本

2014年5月キャンパス熊本が発会し、山本智恵子氏が代表を務め、訪問看護師として勤務しながら活動を続けてきた。2016年4月14日熊本地震により自らも被災し避難生活を続けていたが、6月より被災地益城町の支援に入る。

益城町社会福祉協議会の「地域支え合いセンター(※)」事業の委託を受け、熊本地震による最も被害が大きかった県下最大の仮設団地「テクノ仮設団地516戸」の支援を行っている。※益城町社会福祉協議会は、2016年10月仮設団地の見守り機構「地域支え合いセンター」を設立し、NPO等と協働し、巡回訪問による見守り・相談・生活支援・地域交流の促進・介護予防などの総合的な支援体制に取り組んでいる(キャンパス熊本のHP「キャンパス熊本の歩み」より～一部改変)。

2) 九州キリスト災害支援センター

2016年4月に熊本並びに大分、九州全域に起きた大地震に対し、地域と教会を支援するために設立された。熊本地震において被災した教会をはじめ、支援を必要としている方々に対して、諸教会、諸団体と連携しながら長期にわたる支援を行っている。2017年の九州北部豪雨災害に対し、大分県日田市にベースを開設し、日田市・朝倉市・東峰村の被災地域の支援にも入っている(九州キリスト災害支援センターのHP「団体概要」より～一部改変)。

2. 1次隊から5次隊までの活動の特徴

1次隊から5次隊までの活動は、活動前・中・後と詳細に表で示す(表1～表5)。

1次隊では、11月に隊員の募集をして、面接を行い、決定後打ち合わせを実施した(表1-1)。初めての活動であり確保された受け入れ団体1つに学生3名と教員2名で開始した。宿泊場所は、キャンパス熊本(以後、キャンパスと略す)が借り入れしている1軒家であった。

表 1-1 1次隊の主な流れ：隊員募集

11月11日	2年生チャペル
11月17日	1年生チャペル
11月21日	募集締切
11月24日	2名面接
11月28日	3名面接
11月29日	1名面接
11月30日	参加者決定 → 通知

表 1-2 1次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
12月5日	初めての顔合わせ (自己紹介・ボランティアに参加した動機・今後の日程決め)
12月8日	災害看護についての講義(災害看護について配布資料とスライドによる講義)
12月12日	支援にあたっての情報の整理 ・熊本地震の概要 ・熊本地震による被災状況(被災者数・家屋の被災状況など) ・熊本県益城町について(地理・天候など) ・仮設団地について ・どのような方が仮設住宅で暮らしておられるのか(入居者人口ピラミッド・独居高齢者数・入居者の年齢分布・世帯人数など) ・これまで起きていた問題はどのようなものがあるか ・いま起きている問題はどのようなものがあるか
12月15日	第1次隊で行う活動を議論、おおまかに決定 収集した情報を踏まえ、自分たちがぜひ実施させていただきたい実施できそうな活動を各々発表。その中から ・集会所の飾りつけ ・毎日午前中に開かれている「お茶っこ」という集まりの手伝い ・仮設住宅で暮らす子どもとのレクリエーションと冬休みの宿題をみる ・キャンパス熊本の活動として行われている家庭訪問にご一緒するという4つを主な活動として行うことを決定した。
12月19日	・バス乗車時間の最終確認 候補がいくつもあったので、表を印刷し、みんなで話し合い
12月20日	・「木」の型作り これからの大事な飾り付けの要となる「木」の作成作業
12月21日	・バス往復乗券購入 当日の混雑を避けるために事前に購入。4枚切符、往復切符などを利用した ・「木」のラミネート 型は前日に作っていたため、ラミネート作業の完了を目標

表 1-3 1次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後	その他
12月25日	曇		高速バス移動(博多→益城IC)	
12月26日 (1日目)	晴	2年生：訪問巡回 2年生/1年生：お茶っこ	2年生：訪問巡回 2年生/1年生：飾りつけ キャンパス熊本代表の講話	キャンパス熊本スタッフさん講話
12月27日 (2日目)	雨 曇	2年生：事務所整理 2年生/1年生：お茶っこ	2年生：訪問巡回 2年生/1年生：子ども交流 「みんなの家」飾りつけ	
12月28日 (3日目)	曇	1年生：訪問巡回 2年生2名：お茶っこ	1年生：訪問巡回 2年生2名：子ども交流 高速バス移動(益城IC→博多)	

表 1-4 1次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
1月6日	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成
1月12日	学長へ活動後の報告 活動を通しての学びやこれからの抱負などを述べ、学長・学長補佐より動かしのお言葉をいただいた。
1月18日	1次隊の活動をどのようにして学内・学外に発信していくか、議論 学内：礼拝・活動記録にて 学外：大学HPにて 学内・学外：報告書 以上の方法に決定し、今後の日程や計画決めを行った。報告書作成作業
2月27日	PPTや発表原稿を作成(全体調整)
2月28日	2次隊への送付
4月7日	チャペル報告会準備
4月13日	チャペルにて報告会(対象：1年生) 兼 2017年度募集
4月19日	チャペルにて報告会(対象：2年生) 兼 2017年度募集
4月28日	チャペルにて報告会(対象：3年生)

活動内容は、キャンパスで集会所の飾りつけ、毎日午前中に開かれている「お茶っこ」という集まりに参加し、被災した時の話を聞かせてもらい、被災者の当時の気持ちを知ることが出来ていた。仮設住宅で暮らす子どもとのレクリエーションや

表 2-1 2次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
2月28日	1次隊からの引き継ぎ、初めての顔合わせ ・ボランティアの活動内容 ・益城町の現状 ・自己紹介 ・ボランティアに参加した動機 ・今後の日程決め
3月21日	支援にあたっての情報の整理 ・熊本地震の概要 ・熊本地震による現在の被災状況(被災者数・家屋の被災状況など) ・九ヶ丘について 以上について各自インターネットや過去の新聞記事で情報収集しまとめたものの共有を行った。 1. 第2次隊で行う活動を議論・決定 収集した情報を踏まえ、自分たちがぜひ実施させていただきたい実施できそうな活動を各々発表。その中から ・集会所の飾りつけ ・毎日午前中に開かれている「お茶っこ」の集まりの手伝い、レクリエーションの実施 ・仮設住宅で暮らす子どもとのレクリエーション ・キャンパス熊本の活動として行われている家庭訪問にご一緒する(巡回) ・九ヶ丘での活動(主に家屋の片付け) という5つを主な活動として行うことを決定した。 2. 活動に必要なものをリストアップ、買出し 3. バス乗車時間の最終確認 4. バス往復乗券購入
3月22日	レクリエーションのための準備 飾りつけのためのラミネート チラシ作成
3月28日	災害看護についての講義(災害看護について配布資料とスライドによる講義) 活動に向けて活動内容や必要物品などの最終確認

表 2-2 2次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
3月29日	晴	移動	買出し、食事の準備、今後の予定の確認
3月30日 (1日目)	晴	キャンパス 災 九ヶ丘 2年生：巡回 2年生/1年生：公園整備 2年生：家屋の整理	子どもとの遊び キャンパス熊本スタッフさん講話
3月31日 (2日目)	雨 曇	キャンパス 災 九ヶ丘 2年生：巡回 2年生2名：飾りつけ 1年生：家屋の整理	子どもとの遊び 家屋の整理
4月1日 (3日目)	晴	キャンパス 災 九ヶ丘 1年生：巡回 2年生2名：さくら祭り 2年生：家屋の整理	子どもとの遊び 家屋の整理

*キャン(キャンパス熊本の略)、九ヶ丘(九州キリスト災害支援センターの略)

表 2-3 2次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
4月6日	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成
4月27日	報告書の内容確認 報告書作成作業
5月9日	報告書フィードバック、チャペル準備、3次隊送りなどスケジュール決め
5月23日	PPTフィードバック、3次隊への送り日時決定 (8月8日12:45~、302ゼミ室)
5月31日	チャペルにて報告会(対象：1年生)
6月8日	3次隊への送り
6月9日	チャペルにて報告会(対象：3年生)
7月6日	チャペルにて報告会(対象：2年生)

冬休みの宿題をみる、家庭訪問に同行し、住民との関係づくり、安否確認の方法を学ぶことが出来た。現地での日々の活動終了後に活動の振り返りを実施した(表1-3)。

2次隊では、学生受け入れ団体の一つ追加した。九州キリスト災害支援センター(以後、九キ災と略す)というキリストの愛の精神に基づき、被災された方々の傍らに立ち、物資の供給・人の支援・精神的支援を行っている。隊員も学生1名を追加し、合計4名となる。九キ災の宿泊場所は、教会であった。活動内容としては、キャンパスで新たに公園整備をしており、その手伝いを行った。九キ災では、家屋の整理を行った(表2-2)。

3次隊の活動前に2回目の隊員募集を行った(表3-1)。3次隊から子ども交流活動での遊びの充実を図るため隊員にB大学子ども発達学科の学生2名も参加して学生合計6名となる。看護学科と子ども発達学科の学生が協働して活動した。キャンパスの宿泊場所が仮設住宅の談話室へ変更となった。活動内容として、被災者の仮設住宅での暮らしが長期に渡ってきているため、住民の健康維持のために新たに健康測定会とミニ講和を2つの受け入れ団体で追加した。九キ災では、急遽、活動初日に杷木中学校避難所支援も行った(表3-3)。情報発信として、グーグルを利用した活動ブログ(A看護大学が所属する学院全体に公開可能)を作成し、教員学生を中心に運用している。

4次隊、5次隊は、活動内容も軌道にのり、2回以上参加する学生が始めて参加する学生を先導して、計画を立案し進めていた。

3. ボランティア活動前、活動中、活動後

1) 活動前

まず、ツアー前後を含めたスケジュールを作成して、事前課題の設定・活動内容の企画立案を行った。活動開始1か月前位に教員が受け入れ団体へ事前訪問して、打ち合わせを行った。打ち合わせ内容は学生が計画した健康測定やミニ講和、子ども交流を伝えて、実施する場所の相談などを現地担当者で行った。現地のニーズに応じて活動内容

表3-1 3次隊の主な流れ：隊員募集

4月13・19日	1次隊報告会に合わせチャペルで募集
4月28日	募集締切
5月12日	1名面接
5月12日	4名面接
5月15日	4名面接
5月18日	参加者決定 → 通知

表3-2 3次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
6月8日	2次隊からの引き継ぎ、3次隊初顔合わせ ・ボランティアの活動内容 ・益城町の現状 ・自己紹介 ・ボランティアに参加した動機 ・今後の日程決め 各自、事前学習・事前準備
6月13日	事前学習内容決め、測定練習、活動内容の提案
7月3日	合同会議1回目(12:30~13:20テレビ会議) ・自己紹介 ・これまでの活動紹介(1次隊2次隊のPPTを上映) ・8月の活動内容提案 ・Googleサイトの説明 ・その他(写真撮影・7次隊7/8の確認)
7月8日	合同会議2回目(9:00~12:00天神サテライト) ・グループメンバー決め ・それぞれの活動内容を説明 ・役割分担と期限 ・今後の予定決め
7月19日	合同会議3回目(テレビ会議) ・7/15~18現地情報の伝達 ・8/4の合同会議について
8月4日	合同会議4回目(天神サテライト) ・女学院大と看護大、それぞれの進捗状況の確認 ・役割分担の再確認 ・所持品など諸注意

~昼休みや放課後に集合し事前学習・事前準備~
●A看護大学
7/10~12
7/28~27
8/1
8/3

表3-3 3次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
8月8日	晴	移動	スケジュール確認、Google確認
8月7日(1日目)	晴	テクノ仮設住宅 お茶っこ(健康測定会、ミニ講和) 杷木中学校避難所支援(救護所・子ども支援)	子ども支援 Y氏(テクノ仮設 回地自治会長) の講話 キャンパス アレンス
8月8日(2日目)	晴	お茶っこ(健康測定会、ミニ講和) 事務所待機	子ども支援
8月9日(3日目)	雷を伴う 豪雨の ち晴れ	2年生:巡回 3年生2名:お茶っこ 木山上辻仮設住宅 健康測定会、ミニ講和	子ども支援 Y氏(九州キリスト 災害支援センター 看護部)の講話

※キャン(キャンパス熊本)の略、九キ災(九州キリスト災害支援センター)の略

表3-4 3次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
8月中旬	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成 報告書作成作業
	報告書フィードバック、チャペル準備 4次隊送りなどスケジュール決め
	PPTフィードバック
9月29日	チャペルにて報告会(対象:1年生)
10月2日	チャペルにて報告会(対象:2年生)
11月11日	チャペルにて報告会(対象:3年生)
12月12日	チャペルにて報告会(対象:4年生)
11月4日	4次隊への送り
1月	報告書の内容確認

を適宜、変更や改良を行った(表1-2、表2-1、表3-2、表4-1、表5-1)。

表 4-1 4次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
11月4日	(10:00~15:00 天神サテライト) 3次隊からの引き継ぎ、4次隊初顔合わせ ・自己紹介(参加動機) ・活動紹介、現地の様子 ・益城町の現状 ・今後のスケジュール決め ・5次隊の活動内容とスケジュール決め 各自、事前学習・事前準備
11月20日	(13:00~13:20 第6回テレビ会議) ・自己紹介 ・事前学習、事前準備の内容決めと役割分担 ・今後のスケジュール決め ・メンバー決め
11月24~25日	・4次隊活動に向け、現地スタッフとの打ち合わせ ・現場視察とボランティア
11月29日	(13:00~13:20 第7回テレビ会議) ・自己紹介 ・現場視察の報告 ・次回、合同会議までに行うことの確認 ・活動中のスケジュール確認
12月17日	(10:00~12:00 天神サテライト) ・各自調べてきたことの発表 ・各大学で企画してきたことの発表 ・今後の予定を確認 ・その他(保険加入、誓約書記入、持参品と共同購入品の確認)
12月23日	(10:00~12:00 天神サテライト) ・各大学での準備状況の発表 ・役割分担の再確認 ・ミニ講話の練習

~昼休みや放課後に集合し事前学習・事前準備~
 ●A看護大学
 12/4
 12/7
 12/14
 12/15
 12/18
 12/20

表 4-2 4次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
12月26日	晴	移動	スケジュール確認、ミニ講話の練習
12月27日(1日目)	晴	キャン(テクノ)仮設住宅 お茶っこ(健康測定会、ミニ講話) 広崎仮設 クリスタルホール演奏会	子ども支援 Y氏(テクノ)仮設団地自治会長)の講話
12月28日(2日目)	晴	キャン(テクノ)仮設住宅 健康相談会(健康測定会、ミニ講話) 広崎仮設 年末大掃除	子ども支援 広崎仮設 健康測定会、ミニ講話
12月29日(3日目)	晴	キャン(テクノ)仮設住宅 2年生:巡回 3年生1名、1年生1名:お茶っこ 津森仮設住宅 イモ煮会、健康測定会、ミニ講話	子ども支援 Y氏(九州キリスト 災害支援センター看護部)の講話

*キャン(キャンパス熊本の略)、九キ災(九州キリスト災害支援センターの略)

表 4-3 4次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
1月	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成 報告書作成作業
1~3月	報告書フィードバック、チャペル準備、5次隊送りなどスケジュール決め
4月10日	PPTフィードバック
2月26日	5次隊への送り
4月16日	チャペルにて報告会(対象:2年生)
4月20日	チャペルにて報告会(対象:3年生)
4月18日	チャペルにて報告会(対象:1年生)
運営	報告書の内容確認

2) 活動中(内容)

(1) 健康測定会とミニ講和

3次隊から被災者の健康維持のために開始した健康測定会とミニ講和では、被災者の皆さんに健康維持の関心を持ってもらい、健康維持の重要性を理解してもらうことが出来た。学生は、現地到着初日の被災者とのコミュニケーションでは何を話せばよいかわからず、ぎこちなかったが、健康測定会やミニ講和などを通して徐々に話をすることが出来るようになった。4次隊や5次隊では、健康測定会とミニ講和で被災者の皆さんとも距離が近くなり、顔なじみになったことで被災者の方が再会を喜び、忘れないで欲しいなどの気持ちを伝えられた。

(2) 子ども交流

看護学科と子ども発達学科の学生が協働したことで、看護学生は自分たちが考えつかないような遊びが追加されたことで専門の必要性を感じていた。子ども発達学科の学生は、看護学生の積極的な活動のみで、学内では見せることのなかった主体的な行動をとることが出来ていた。また、看護学生が楽しく活動をしていたことを共に行うことで子ども発達学科の学生も楽しく活動をしていた。

(3) 活動中の情報発信

活動中はグーグルを利用した活動ブログ(学内ネットワーク)により、参加していない学生および教職員にも現地での様子をタイムリーに発信した。学内からの教員の応援メッセージは、隊員の活動の励みになった。

(4) その他の活動

2次隊から開始した九キ災での活動を通して、学生はキリスト教の愛の精神について、祈りの時間を共に過ごすことで活動前後に気を静める意義や相手を思いやる配慮について感じていた。

3) 活動後

各隊次の活動終了後に報告書作成を行った。今回の隊員の中にはチャペルでの活動報告を聞き、学生であっても現地の人の力になることが出来るのだと強く感じて参加を志望した学生もいた。

表 5-1 5次隊の主な流れ：活動前内容

日付	内容
2月28日	(10:00~15:00 天神サテライト) 4次隊からの引き継ぎ、5次隊初顔合わせ ・自己紹介(参加動機) ・活動紹介、現地の様子 ・益城町の現状 ・今後のスケジュール決め ・5次隊の活動内容とスケジュール決め 各自、事前学習・事前準備
3月7日	・事前学習、事前準備の内容決めと役割分担 ・今後のスケジュール決め ・メンバー決め
3月12日	・教材づくり、シナリオづくり ・現地スタッフと連絡、調整 ・ポスター掲示やチラシ配布依頼
3月18日	・教材づくり、シナリオづくり ・健康教育のデモンストレーション
3月23日	・事前学習と事前準備 ・健康教育のデモンストレーション
3月25日	(10:00~12:00 天神サテライト) ・各大学での準備状況の発表 ・役割分担の再確認 ・ミニ講話の練習 ・各自調べてきたことの発表 ・各大学で企画してきたことの発表 ・今後の予定を確認 ・その他(保険加入、誓約書記入、持参品と共同購入品の確認)

表 5-2 5次隊の主な流れ：活動内容

日付	天気	午前	午後
3月28日	晴	移動	スケジュール確認、ミニ講話の練習
3月29日 (1日目)	晴	テクノ仮設住宅 子ども支援	子ども支援
	九 キ 災	広崎仮設 健康測定会、ミニ講話	広崎仮設 子ども支援
3月30日 (2日目)	晴	テクノ仮設住宅 清掃・花植え	子ども支援 Y氏 (キャンナス 熊本代表) の講話
	九 キ 災	津森仮設 子ども支援	津森仮設 健康測定会、ミニ講話
3月31日 (3日目)	晴	テクノ仮設住宅 1年生：巡回 3年生、2年生：子ども支援	健康測定会、ミニ講話 M氏 (九キ災ディレク ター) の講話
	九 キ 災	馬水仮設住宅 健康測定会、ミニ講話	広崎仮設 子ども支援

*キャン(キャンナス熊本の略)、九キ災(九州キリスト災害支援センターの略)

表 5-3 5次隊の主な流れ：活動後内容

日付	内容
4月	活動に際してお世話になった方々へのお礼状の作成 報告書作成作業
4~7月	報告書フィードバック、チャペル準備、6次隊申込みなど スケジュール決め PPTフィードバック
5月19日	6次隊への申込み
6月4日	チャペルにて報告会(対象：2年生)
6月11日	チャペルにて報告会(対象：3年生)
6月18日	チャペルにて報告会(対象：1年生)
	報告書の内容確認

表 6 学園祭(ナーシングフェスタ)

日付	内容
2017年9月~ 11月10日	販売する小物を現地から仕入れる、現地の作成者と打ち合わせ、 パネル作成、写真の入手、ブースの飾り付けなど
11月11日	ナーシングフェスタ当日 熊本ブースを設け、活動報告のPPTを流したり、パネルを展示した。 被災者が作成した小物を販売し、売上金は全額寄付した。

11月の学園祭では、熊本支援に参加したあるいは今後参加予定の学生らが企画・実施をして、被災者住民作成の手芸用品を販売し、その収益を被

災地に還元した(表6)。看護大HPへの活動報告などは、それぞれ担当者を決めて、情報の共有を行うために計画した内容を実行することが出来た(表1-4、表2-3、表3-4、表4-3、表5-3)。

4. 学生ボランティア支援

隊員構成として学年が偏らず他学年との交流が出来るようにした。下級生は先輩学生の主体的な姿を見て、私も先輩のようになりたいという思いを抱いていた。活動前中後と一貫して学生の自主的な運営を促すことを心がけ、1次隊の頃は教員主体で行ったことを徐々に役割を学生へ委譲していった。ボランティア活動を2回終了した学生は次のグループへの申し送りの際に、活動前にやらなければならない内容を主体的に考え、計画を提案していた。次のグループへ状況を考えながら次のグループが決断出来るように進めていた。ボランティア活動2回目の学生は、1回目の学びを活かしてリーダーシップを図ることが出来ていた。

IV. 考察

1. ボランティア活動前、活動中、活動後

1) 活動前

1次隊の活動を開始することができたのは、事前に学生受け入れ団体であるキャンナス熊本の調査、交渉をしたボランティア活動発案者の働きによるものであり、受け入れ団体を調整するコーディネーターの役割を果たすことが出来ていた。

活動前準備として学生が計画した活動内容を事前に教員が現地に赴き、受け入れ団体担当者へ伝えて、現地のニーズを学生へ伝達したことは、コーディネーターのマッチングの役割を担っていた。現地のニーズに応じて活動内容を適宜、変更や改良を行ったことは、菅(2011)の災害ボランティアの支援に際して被災者・地域に合わせて支援方法や体制を柔軟に変えていく必要があるということに該当し、災害ボランティアの支援として適切であったと考えられる。そのことが今までボランティア活動を継続して行っていることにもつながっていると推察される。

2) 活動中 (内容)

(1) 健康測定会とミニ講和

3次隊から開始した健康測定会やミニ講和で、学生がコミュニケーションをうまく行えなかったが、徐々に話をすることが出来るようになった。そのことは、人間性や対人スキルに関わるボランティアの特徴を体験し、学生の対人スキル向上につながっていたと考えられる。田中(2011)もアイデンティティ獲得にとって具体的な他者や社会集団との関係が重要であると述べている。

健康測定会とミニ講和で被災者の皆さんとも距離が近くなり、顔なじみになったことで被災者が再会を喜び、忘れないで欲しいなどの気持ちを伝えられたことより活動継続の必要性を再認識した。長期休暇を利用して2年間で5回活動を継続した意義があると考えられる。渥美(2013)も長期に亘る復興支援の活動に求められることは地域の文脈を踏まえて、じっくり取り組むこと、寄り添い続けることであると述べている。

(2) 子ども交流

3次隊から隊員にB大学子ども発達学科の学生と教員が加わったことにより、子どもの遊び内容のバリエーションが増えた。また子供に合わせた関りなどの充実を図ることが出来たことで、子どもらの発達や情緒安定を促すことの一助になったと考えられる。看護学科と子ども発達学科の学生が協働したことによる効果については、看護学生の専門の必要性を感じていたことや子ども発達学科の学生が活動を楽しそうにしていた姿から異なる学科の協働によりお互いに刺激を受けており、妹尾(2008)のボランティア経験の効果による人間関係の広がりを持つことが出来た。学生たちは、積極的に変化していき、視野の広がりを持つことが出来たと考えられる。

(3) 活動中の情報発信

グーグルを利用した活動ブログについては、学院全体に公開可能なブログであるが、今後さらに多数がフォローする仕掛けづくりが課題で

ある。

3) 活動後

活動後の報告について学外への活動の公開方法として、現在ホームページを利用しているが、多くの人が閲覧するような方法の検討も必要である。

今回の隊員の中には、チャペルでの活動報告を聞き、参加を志望した学生もいたことから活動報告の意義は大きいと考える。酒井ら(2013)も活動での学び、感じたことの報告は、多くの人に知ってもらえる機会となり、意義について述べている。

2. 学生ボランティア支援

学生の隊員構成としてボランティア活動で他学年との交流が出来るようにしたことで、下級生はモデルとなる先輩像を抱く機会となった。伊丹(2008)の研究の中でも学生たちの要望として他学年と交流することはよい刺激になるので機会を増やしてほしいと述べられており、学年を超えた交流の効果があったことが推察された。

2次隊よりボランティア活動を2回参加する学生もでてきたことから、教員主体で行った内容について徐々に役割を学生へ委譲していった。そのことで、学生は主体的に考え、行動をとることが出来ていった。主体的な行動は、箕浦、高橋(2012)の社会人基礎力に通じ、主体的に考えることは「前に踏み出す力」、計画力は「考え抜く力」、次のグループへ配慮し決断を任せるようにしたことは「チームで働く力」につながり、将来看護職となる学生にも求められる能力であり、重要であると考えられる。

V. おわりに

今回、熊本地震復興支援ボランティア活動および学生ボランティア支援について振り返りを行うことで、活動の評価と今後の課題を見出すことが出来た。

活動前では、教員が学生ボランティアの受け入れ団体を調整すること、活動前準備として学生と現地のニーズのマッチングを行い、コーディネートの役割を果たすことが出来ていた。事前調整の

中で活動内容を被災者・地域に合わせて変更していき、災害ボランティアとして必要な支援を適切な方法で行うことが出来た。

活動中（内容）では、健康測定会とミニ講和を通して学生の対人スキル向上につながったと考えられる。子ども交流では、子ども発達学科の学生参加により、子どもの遊び内容が充実して、子ども支援につなげることが出来た。さらに、他学科学生との協働作業により、学生は視野と人間関係の広がりを持つことが出来た。活動中の情報発信としては、今後さらに多数がフォローする仕掛けづくりが課題である。

活動後では、報告書作成をはじめ、様々な場面での報告を行うことで多くの人に知ってもらう機会となった。

学生ボランティア支援では、学生は他学年との交流により、よい刺激を受けることが出来た。さらに、教員は活動前中後と一貫して学生の自主的な運営を促すことを心がけ、徐々に役割を学生へ委譲していった。学生は2回目のボランティア活動では主体的に考え、リーダーシップを発揮することが出来ていた。このような2016年から2年間に亘る活動の継続が、復興支援の活動に求められている寄り添い続けることにつながっていると考えられる。

今後は、情報発信方法や情報共有の課題などの検討が必要である。今後も被災者のニーズに合わせて、さらに活動を継続して熊本地震の復興支援を行っていくために現地団体と連携を図り、協力をしていきたいと考える。

謝辞

我々のボランティアを快く受け入れてくださった熊本県益城町社会福祉協議会委託団体のキャンパス熊本の山本代表およびスタッフ、九州キリスト災害支援センターのチーフディレクターの諸藤さんおよびスタッフの皆様、また福岡女学院看護大学から支えて下さった教職員の方々に心より感謝いたします。

本活動は、福岡女学院2017年度学院活性化推進助成金（代表：酒井康江）から助成を受けて活動

したものである。

文献

- 渥美公秀. (2013). 被災者支援について災害ボランティアから考える. 消防科学と情報, 112, 6-9.
- 伊丹君和. (2008). 未来看護塾の活動および人と関わる体験が看護学生へもたらす効果. 人間看護学研究, 6, 49-61.
- 箕浦とき子, 高橋恵. (2012). 看護職としての社会人基礎力の育て方—専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素—. 90-91, 日本看護協会出版会, 東京.
- 酒井康江, 松尾和枝, 奥野由美子他. (2013). 学外ボランティア事業の進め方—東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアーの実践報告（第一報）—. 福岡女学院看護大学紀要, 4, 35-41.
- 酒井康江, 丸山智子, 松尾和枝他. (2016). 学外ボランティア事業に参加した学生の学び—東日本大震災後の復興支援ボランティアスタディツアーからの報告（第二報）—. 福岡女学院看護大学紀要, 6, 11-17.
- 佐々木正道. (2003). 大学生とボランティアに関する実証的研究. 221-298, ミネルヴァ書房, 東京.
- 妹尾香織. (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16, 35-42.
- 総務省統計局. (2013). 災害ボランティア活動を行った人の状況. 2018-12-3. <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi671.html>.
- 菅磨志保. (2011). 日本における災害ボランティア活動の論理と活動展開—「ボランティア元年」から15年後の現状と課題—. 社会安全学研究, 創刊号, 55-66.
- 本間照雄. (2014). 災害ボランティア活動の展開と新たな課題. 社会学年報, 43, 49-64.
- 田中雅文. (2011). ボランティア活動とおとなの学び. 19, 学文社, 東京.